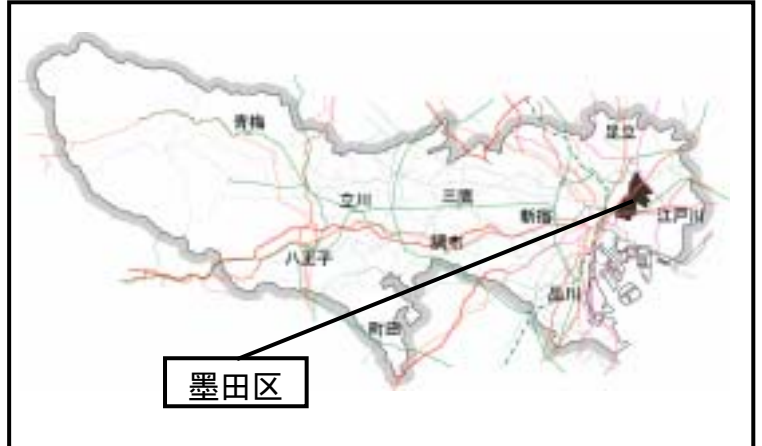


概要 雨水利用による水循環への取組

東京都墨田区は早い時期から下水道化が整備された地域であったが、「合流式」下水道が採用されていたため、汚水・工場の廃水・雨水が一本の下水管に流入してしまい、溢れた下水がビルの地下に設置された飲用水タンクに混入する事態が起きていた。当時墨田区保健所では、このような都市型洪水に対策を講じるべく、水循環の研究を始め、雨水利用に行き着いた。雨水を溜めることにより下水道に流れ込む雨水の量を減らすことができ、溜めた雨水は湯水や災害時の生活用水として活用できる。また、木造建造物を多く抱える墨田区にとって、雨水利用は防災対策としても成立した。1982年、両国国技館に雨水利用を導入したのを皮切りに、現在墨田区の21の公共施設で雨水利用システムが採用されている。

公共施設以外にも、地域交流の場に雨水利用システムが一役買っている。一寺言問地域には「路地尊」(ろじそん)という防災のシンボルが5つ設置されている。路地尊には「災害時には避難路、平時には地域の広場になる路地を尊ぶ」意味が込められており、当初はちりとり・箒などの清掃器具や防災設備のついたものであったが、2号基以降は雨水タンク機能を備えている。路地尊のうち4基はポケットパークなどに設置され、他地域にも雨水タンクが13基設置されている。また、民間の施設では、例えば区内の銭湯で屋上に雨水タンクを設置し、トイレや池に利用するとともに、空き缶・牛乳パックの洗い場を設け、資源回収センターの役割ももたせているところもある。



経緯

- 1976年 墨田区保健所飲用水の衛生指導を行う。都市型洪水の対策のため水循環の研究を開始する
- 1980~2年 都市型洪水の発生
- 1982年 移転計画中の両国国技館へ雨水利用導入を日本相撲協会に申し入れ
- 1983年 外手児童館を皮切りに墨田区の公共施設に雨水利用システムを導入
- 1988年 路地尊に雨水利用が導入(2号基)
- 1994年 雨水利用東京国際会議が墨田区で開催される(延8000人参加)
- 1995年 「墨田区雨水利用推進指針」策定
雨水利用を進める全国市民の会(母体:雨水利用東京国際会議実行委員会)
雨水利用促進助成金制度開始
- 1996年 雨水利用自治体担当者連絡会発足
- 1997年 雨水利用技術者養成講座を開始。建築士や設備士などを対象
- 2000年 墨田区の雨水利用プロジェクトが国際環境自治体協議会の「国際自治体環境賞」を受賞
- 2001年 「雨水資料館」開館
- 2002年 雨水利用ブックレット(英語版)(墨田区、国連環境計画国際技術センター及び雨水利用を進める全国市民の会の三者で共同制作)の発行

出典

- すみだ中小企業センターホームページ (<http://www.techno-city.sumida.tokyo.jp/>)
- 墨田区ホームページ (<http://www.city.sumida.tokyo.jp/>)
- YOMIURI ON LINE (<http://www.yomiuri.co.jp/komachi/news/ne170401.htm>)
- 構想日本ホームページ (<http://www.kosonippon.org/prj/evm/jirei/>)

現在の活動内容

1. 路地尊設置

その後の管理・維持は全て住民が担当

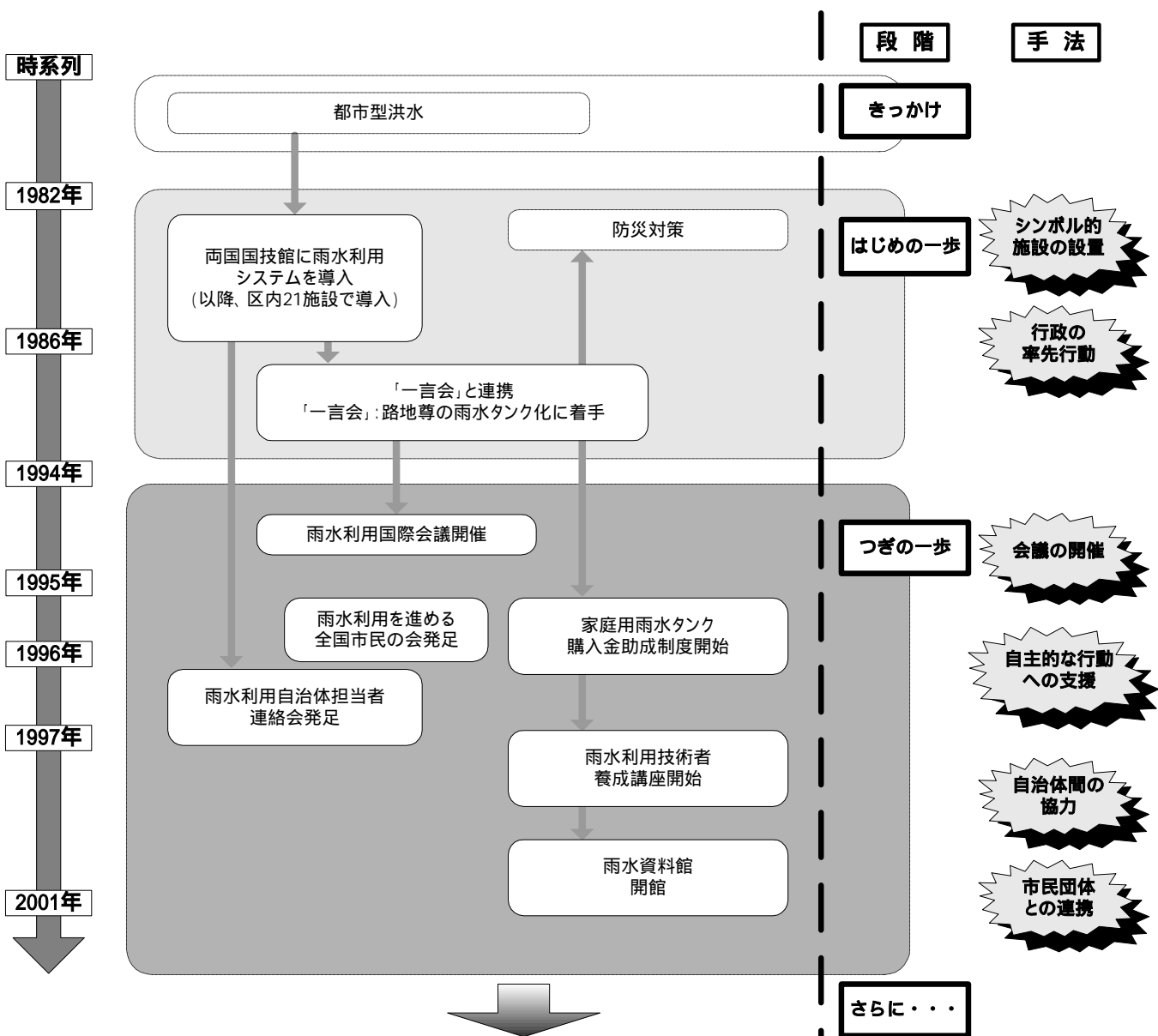
2. 雨水タンク購入金助成


3. 公共施設の雨水タンク設置

4. 雨水利用啓蒙活動

雨水利用自治体担当者連絡会、雨水利用技術者養成講座、雨水利用を進める全国市民の会など

活動の歩み

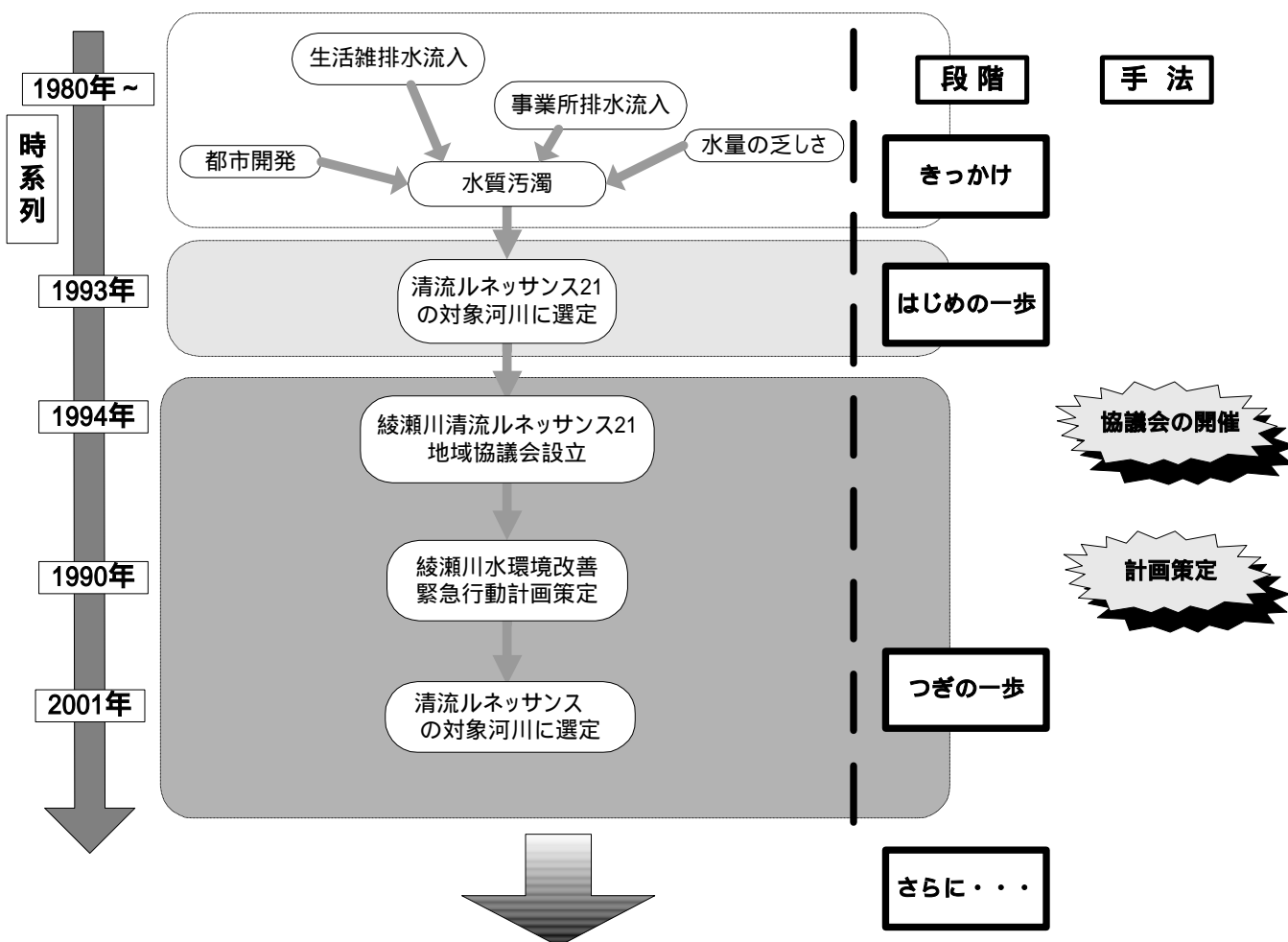


	テーマ	事例・地域名	綾瀬川（埼玉県、東京都）
<p>概要</p> <p>水質浄化</p> <p>綾瀬川は、桶川市に源を発し、埼玉県東部を流れ、古綾瀬川、伝右川、毛長川等を合わせて、東京都で中川に合流する一級河川。全長 47km（うち埼玉県内約 39km）</p> <p>流域に山地がなく、元来水量が乏しく、また、首都圏拡大に伴う急激な開発により、生活雑排水・事業所排水等の流入が激しくなった。しかし、建設省の新規施策「流域ルネッサンス 21」の第一次計画対象河川に選定されたことから、関係機関が一体となって浄化計画を総合的に充実させ、水質改善に一層の努力を行ってきた。2001 年からは「清流ルネッサンス 21」が策定され、引き続き関係者一体となった水環境改善の取組を実施している。</p> <p>以上のような取組から、綾瀬川の水質は大幅な改善が見られている。</p>			
<p>経緯</p> <p>1596～ 1614 年 備前堤築造工事の際、源流の元荒川から、水害予防や新田開発の促進のために切り離されて、独立の河川となった。</p> <p>1980～ 1994 年 全国一級河川水質ランキングで 15 年連続ワースト 1。</p> <p>1993 年 7 月、清流ルネッサンス 21 の対象河川に選定。</p> <p>1994 年 11 月、綾瀬川清流ルネッサンス 21 地域協議会設立。</p> <p>1995 年 10 月、綾瀬川水環境改善緊急行動計画策定。</p> <p>2001 年 清流ルネッサンス 21 の対象河川に選定。</p>			
<p>出典</p> <p>綾瀬川水すましクラブホームページ（埼玉県）（http://www.pref.saitama.jp/A09/BG00/msc/msc1.html）</p> <p>綾瀬川清流ルネッサンス 21（江戸川工事事務所）（http://www.ktr.mlit.go.jp/edogawa/news/111.html）</p>			

現在の活動内容

- ・綾瀬川清流ルネッサンス 21 地域協議会（2001 年～「清流ルネッサンス 21」に継続）
流域の全自治体（埼玉県、川口市、浦和市、大宮市、岩槻市、上尾市、草加市、越谷市、鳩ヶ谷市、桶川市、八潮市、蓮田市、伊奈町、東京都、足立区、葛飾区）、国土交通省江戸川工事事務所及び学識経験者の参加により設立。
- ・綾瀬川水環境改善緊急行動計画（2001 年～「清流ルネッサンス 21」に継続）
2000 年の水環境目標を定め、総合的・緊急的・重点的に実施すべき施策（下水道事業、河川事業及びその他の流域対策等）の内容を明示。
- ・綾瀬川水すまし作戦（埼玉県）
彩の国ふるさとの川再生戦略の一環。「綾瀬川水すましクラブ」会員を核として、流域全体にわたる草の根浄化活動のネットワーク化を推進するとともに、各流域へのネットワーク化の拡大を図っている。また、生活排水対策として、合併処理浄化槽設置補助金の交付や、「彩の国ふるさとの川再生委員会」（学識経験者、県民代表等）を設置し、ふるさとの川再生のための検討を行っている。

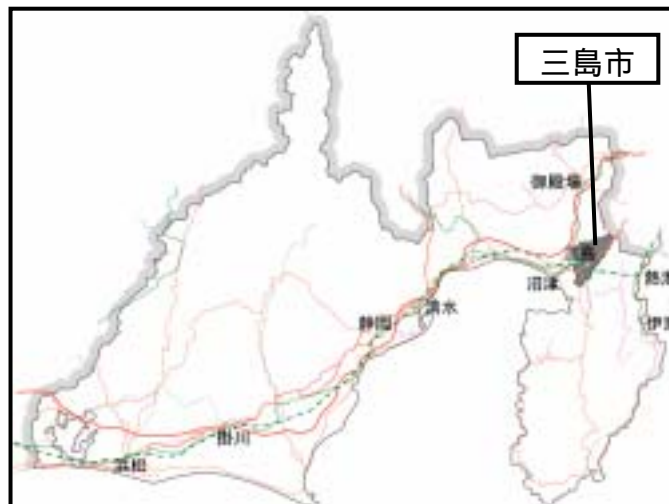
活動の歩み



概要	活動のネットワーク化
----	------------

水への愛着とふれあいが少なくなってしまったことを憂えた住民が、企業等様々な主体を巻き込み、ゴミ捨て場と化していた川をグラウンドワーク手法により再生。市民団体の組織化は、各団体の事業計画などの情報に交流をもたらすとともに、連携と調整がとれた環境改善活動推進体制の整備のきっかけになった。

地元企業は資金援助だけでなく川掃除などの活動で参加。行政は資金援助、企業確保、スタッフ会議に市民と同等の立場で参加している。自然とのふれあい活動や環境教育の現場としても活用されている。



経緯

古くから「水の都・三島」は富士山からの湧水が町中に流れ、美しい水辺空間と自然環境があった。

1960年以降 上流地域での地下水のくみあげや開発の進行、放置森林の増加によるかん養力の減退等の原因により富士山からの湧水が減少。そのため、冬場には湧水池や湧水河川が枯渇し環境悪化が進行。豊かな水辺環境が消滅の危機にさらされた。市内の湧水も水量が減少し、ゴミの投棄や下水路化により悪臭を放つようになった。

1990年 静岡県により源兵衛川整備事業が着手される。

1991年 9月、三島市の誇りと言える「ゆうすい」を市民自身の問題として考える会を「三島ゆうすい会」として発足。

1993年 9月、市内の15の市民団体（三島ゆうすい会、三島青年会議所、三島ホテルの会など）が、市民が一体となって環境問題を解決しようと、半年近い準備期間を経て「グラウンドワーク三島実行委員会」設立。

1995年 河川愛護団体「源兵衛川を愛する会」設立。川の管理主体が中郷用水土地改良区から引き継ぎ。

1996年 三島商工会議所が創立50周年を記念して「街中がせせらぎ」ビジョンを策定し「歩きたい街」「住みたい街」を提唱。

1999年 10月、グラウンドワーク三島がNPO法人の認証を受ける。

2001年～ 5年間で街中のアメニティ資源を活用した住環境整備を行う、「街中がせせらぎ事業」がスタート。

出典

グラウンドワーク三島（<http://www.gwmishima.org/jindex.html>）

三島市ホームページ（<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/seseragi/index.htm>）

現在の活動内容

特定非営利活動法人「グラウンドワーク三島」

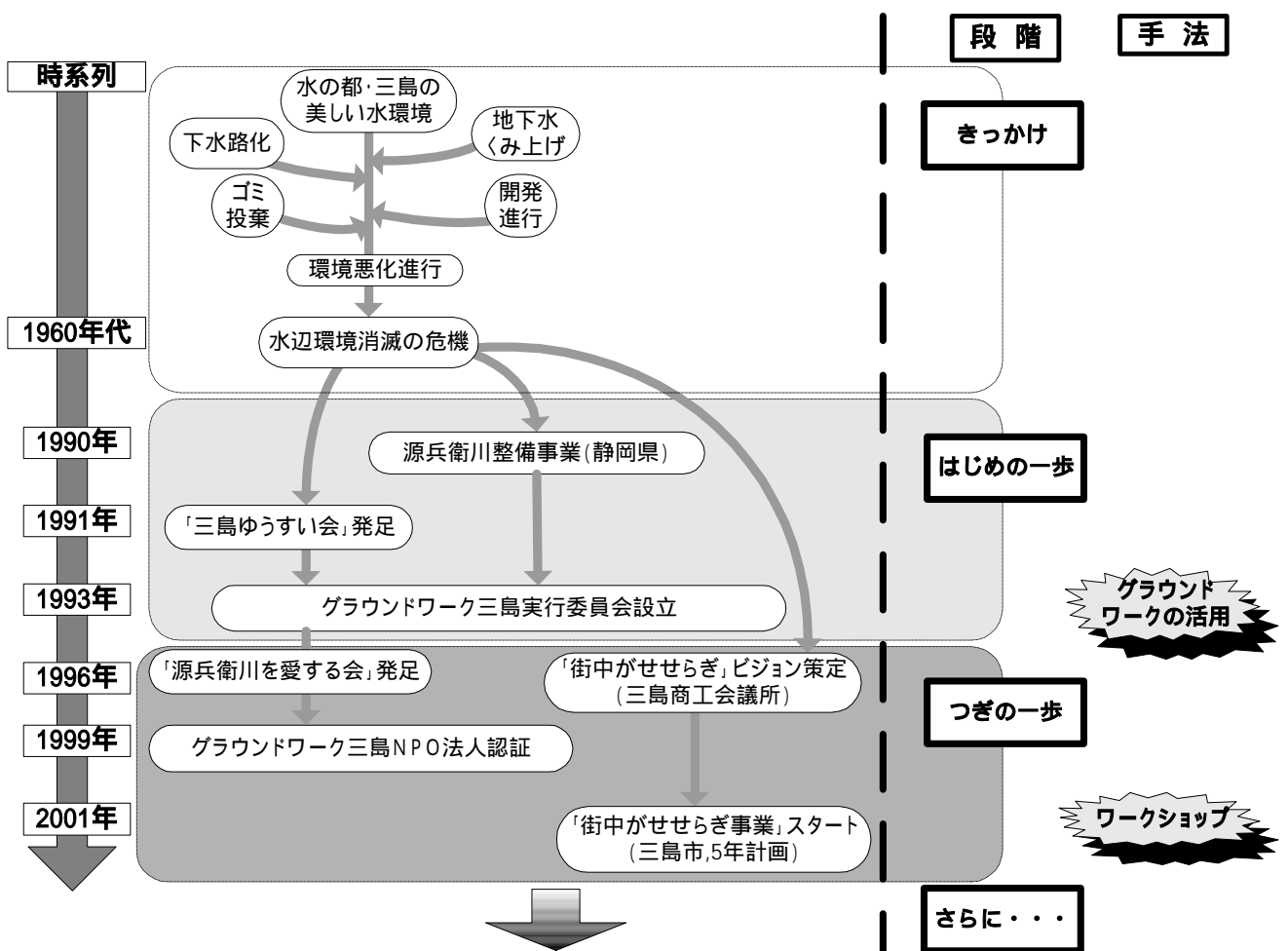
地域総参加型システムの構築への寄与を目指し、グラウンドワーク（市民、行政、企業が一体となった取組）による水辺環境の自主的な企画、整備、維持管理を行っている。


おもな活動内容は、休耕田を利用した公園づくり、定期的な河川清掃や水辺環境の保全、市への政策提言、定期的会合での市庁内各部署との連携・情報提供。

街中がせせらぎ事業

水辺・緑・歴史・文化などのアメニティ資源を回遊ルートで結び、訪れる人と市民が交流できる「ほっとできる快適な空間づくり」を行うといった基本構想を、市民が提唱し、市民主導で企画。これを土台に、庁内の組織や市民レベルの意見交換・ワークショップにより実現性を重視して検討を重ねた。市民・企業・まちづくり団体・行政が役割分担し、相互確認のもと協働（コラボレーション）で計画の実現を目指している。

活動の歩み



	テーマ	水質・水循環	事例・地域名	太田川水系（広島県）
<p>概要</p> <p>流域で水質改善への取組</p> <p>太田川は、広島県西部を流れる一級河川であり、中国地方を代表する河川の一つである。中流域は環境庁の「全国名水百選」に選ばれたことがあるものの、近年の土地開発や生活排水の流入により、その水質が脅かされている。実際に、1992年にシアン汚染、1994年には重油流出に見舞われたが、太田川を生活用水として利用している流域住民の意識を高める結果となった。</p> <p>行政側の取組として、太田川流域振興交流会議がある。同会議は、太田川の水質保全や、流域自治体の地域振興・交流を目的とした組織であるが、前身にあたる太田川流域市町村水質保全交流会議は、太田川改修60周年と放水路概成25周年を記念して1992年に開かれた太田川流域首長会議（太田川サミット）を受けて発足した。住民の流域保全活動の支援役として、重要な役割を果たしている。</p>	<div data-bbox="836 197 1481 869" style="text-align: right;">  <p style="text-align: center;">太田川水系 (太田川流域振興交流会議)</p> </div>			
<p>経緯</p>	<p>1992年 7月、太田川改修60周年と放水路概成25周年を記念し、初回の太田川流域首長会議（太田川サミット）が開かれる。上中流域と下流域の意見交換の場として機能</p> <p>1994年 11月、太田川サミットにて、流域市町村の連携による水質保全対策の実施を提案</p> <p>1995年 2月、太田川流域市町村水質保全交流会議発足</p> <p>1997年 1月、太田川サミットにて、従来の水質保全のほか、地域振興・交流も目的に追加される 11月、太田川サミットにて、水質保全交流会議を発展改組し、太田川流域振興交流会議の設立を決定</p> <p>1998年 4月、太田川流域振興交流会議発足</p> <p>2002年 7月、流域初の広域環境型住民主体プロジェクトとして「太田川たんけん協会（仮称）」を設立予定。</p>			
<p>出典</p>	<p>太田川流域振興交流会議ホームページ（http://www.akinet.ne.jp/ota-gawa/）</p> <p>太田川流域市町村水質保全交流会議（1996）『太田川流域水質保全交流シナリオ』</p> <p>—（1996）『太田川流域水質保全交流 資料編』</p> <p>太田川流域首長会議事務局（1996）『太田川流域首長会議（太田川サミット）第1回～第4回』</p>			

現在の活動内容

2002年度は太田川流域振興交流会議の5周年となることから「リニューアル元年」とし、中期的展望に立って新しい発想で新しい事業を展開することを想定している。また、下部線存続運動における住民の連帯と交流の輪を、住民主体の地域活性化策へと継承発展を目指す。

〔新たな事業展開〕

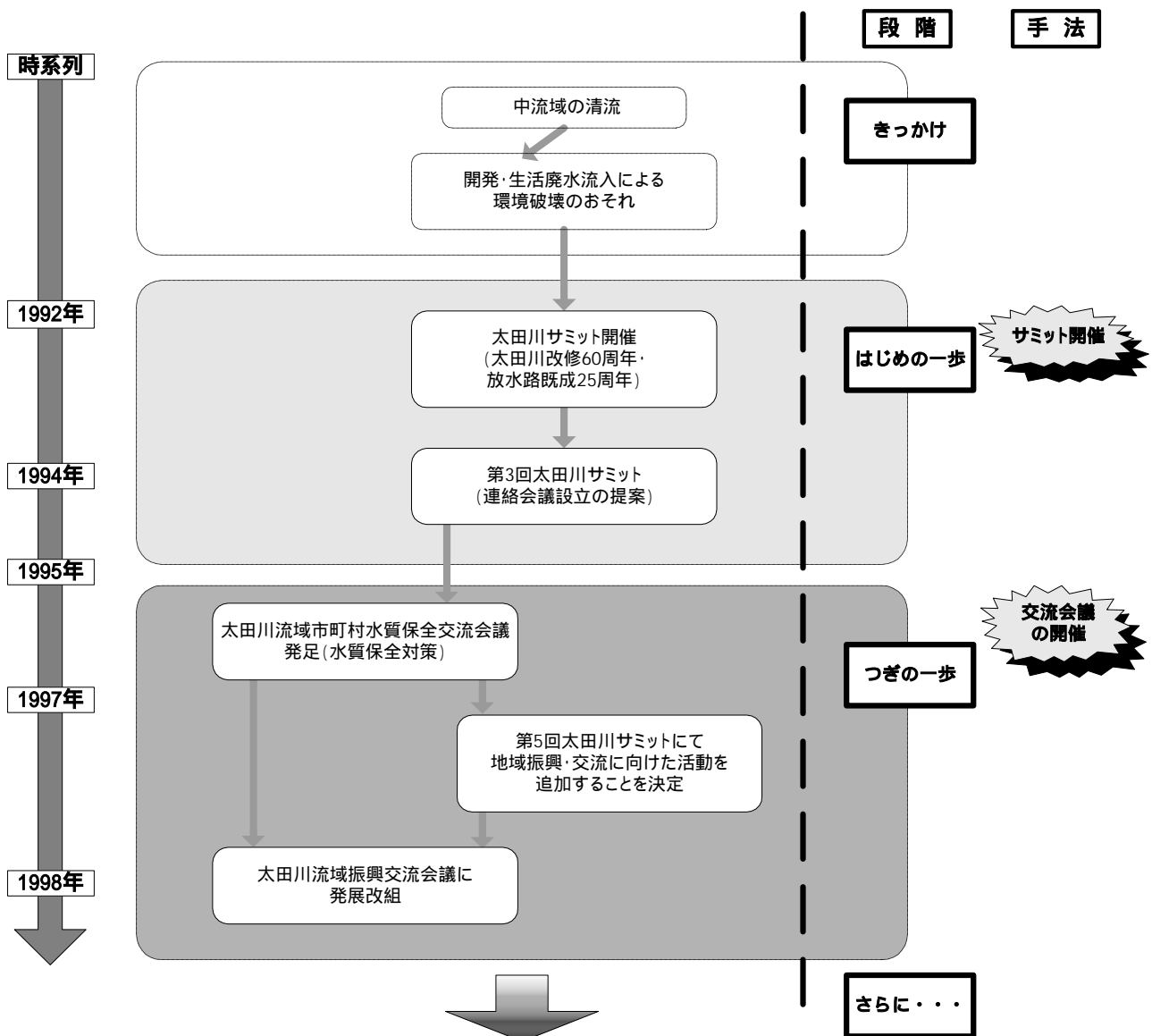
子どもたちの体験・交流学习を基軸とし、太田川流域住民のための事業を推進
 市民活動団体・NPO法人・子ども会等多様な主体による交流事業の実施
 次代を担う若者が主体的に参画し、企画・実施する新たな事業の発掘
 11市町村間で子どもたちによる学校間交流の促進と自然体験の拡充
 「住民・行政双方向の情報発信」を充実強化（新しい情報誌の創刊）

〔太田川流域振興交流会議の構成〕

【流域自治体】広島市（会長）、東広島市、府中町、湯来町、吉和村、加計町、筒賀村、戸河内町、芸北町、豊平町、向原町の11市町村で構成

【オブザーバー】国土交通省太田川工事事務所、広島県河川企画整備室・環境対策室

活動の歩み



概要 水を活かしたまちづくり

長良川上流にある郡上八幡は、三方を山に囲まれ、高温多湿で、地層に石灰岩を含む複雑な褶曲構造のため保水力に恵まれており、まちのいたるところに湧水が湧き出ている。「井戸組合」が洗い水や飲料水をきれいに管理していた名残から、水路がいたるところで清流を流しており、現在も湧水は飲み水・濯ぎ水・洗い水などとして生活の中にもうまくとり入れられている。

八幡町は「水とおどりと心のふるさと」をキャッチフレーズに水の恵みを活かしたまちづくりを進めており、独特の水利用体系を持つまちとして知られている。

また、幾度かの火災経験から、用水路整備や町屋の軒の「うだつ」など、防災面での工夫も随所に見られる。



経緯

江戸時代に水を核とする多面的な水利用システムができあがった。

- 1919年 街の大半を全焼する大火に見舞われたため、防火用水として用水路を整備する。
- 1963年 上水道完成。用水路は市街地における道路拡幅のため大部分が蓋で覆われるようになる。
- 1976年 「水を通じて八幡町を良くしていこう」と、住民団体「さつきの会」が結成される。「行政に任せとくと町は発展しない」という町行政に対する反発心もあり、町内の有志約30人が集まった。
- 1983年 各地区で「八幡町総合計画地区座談会」を開催し、総合計画策定のための資料を集める。計画の基本構想の中に「町並みに調和した風情ある水辺景観の整備と八幡町の伝統建築様式を残している町並みの保全」を盛り込んだ。
- 1984年 用水路の老朽化によって各所で漏水が著しくなる。
- 1985年 宗祇水が全国名水百選の指定を受ける。
- 1985年 「郡上八幡ポケットパーク構想」の報告書がまとめられる。
- 1985年 関係地域の人びとに理解と協力を得るため、全戸を対象に行政により歴史的な水路整備および町並み保存についての説明会が開催される。
- 1991年 4月1日、郡上八幡景観条例施行。
- 1993年 「さつきの会」により「自然水族館」が創られる。コンクリート製の島谷用水の側面をガラス張りに変え、中に放した魚が見えるようにした。
- 1999年 国の「全国都市景観百選」に選定されたのを受け、水と緑と踊りの城下町の景観を再認識し、これからの町づくりに反映させるため、「郡上八幡景観シンポジウム」を開催。テーマは「郡上八幡の美を再認識し街の豊かさを考えよう」。自然、町並み、踊りとコミュニティについて討論した。
- 2000年 事業の推進母体として18人でつくる町民会議を立ち上げた。

出典

八幡町ホームページ (<http://gujo-hachiman.jp/>)

八幡町街並み環境整備事業 (<http://www1.nisiq.net/~matui-i/html-gujyo.htm>) 他

現在の活動内容

「水舟」...竹樋やパイプから自宅に湧水を引き込み、段差をつけて利用するシステム。上段のきれいな水は飲用水、次の舟は果物などを洗う用、その下は食器洗い用、最後に魚のいる鑑賞池に流し込む。食器を洗って出た残飯は魚たちの餌となり、残りは土に沈殿する。水舟を通った水は裏庭の畑で使われ、最後に川に流される。

「ポケットパーク」...約 25 ヲ所設置。民家の水舟を大きくした形の水舟を置いている。まち全体を公園とみて、その中心に住民や観光客が集う場として設けられた。「町で不足している広場・散歩道などの公共空間の確保と景観整備とを同時に実現できるような計画を示してほしい」との町からの依頼で大学教授が構想をまとめ、それが実行に移されたもの。初期には主に町民のための公園と考えられたが、現在では観光客の利用も多い。

「八幡町街なみ環境整備事業」(岐阜県・岐阜大学流域環境研究センター)...長良川上流の吉田川を対象に、流域全体の生態系や森林保全などを含めた河川環境の総合的な保全の在り方を探る研究事業。

「長良川ビジョンアクションプログラム」(岐阜県)...長良川の流域住民代表や学識者が策定した行動計画。

「郡上八幡清流カレッジ」...長良川河口堰の反対運動をしていた方が始めた市民大学。カヌー等自然と親しむ遊び中心の「体験講座」や受講生の子供向け「こども清流カレッジ」もある。

「さつきの会」(武田善吉会長)...文教、環境など4部会に分かれ、「水を通じて町を良くしていこう」とコイの放流、用水の活用、図書の寄贈、清掃奉仕などのボランティア活動や各種講演会の開催、環境整備に対する町への提言などに積極的に取り組んできた。現在では会員も約 120 人にまで増えた。

活動の歩み

